PROJECT

人類学から「リスク社会」を再考する

文
東賢太朗

共同研究 ● リスクと不確実性、および未来についての人類学的研究（2008-2011）

リスクと人類学

迫りくる危険や危機に対し、可能な限りの予測や計測を行い、その結果に応じた最適な対応策をとる。それは「未来の不確実性や偶然性に対処し、セキュリティを確保する」という人類にとって根本的かつ枢要な思考や行動であるといえるのではないだろうか。

そのような思考や行動を「リスク」への認識や対処であると大きくカテゴリー化するならば、「リスク」とは人類学にとって、決して目新しい研究対象の領域ではない。

たとえば、不幸や災厄の原因をローカルな世界観に照らし合わせ把握・認識した上で、それらに対して何らかの方法で対処する災因論や呪術についての研究蓄積は、人類学の古典から現代の著作にいたるまで枚挙に暇がない。また、生態人類学の分野においては、当該社会の自然環境に適応しつつ、狩猟採集や漁業、農業、牧畜などの生業活動をいかに継続するかということが大きく問われている。そこにみられる不確実な自然環境への予測・対処や資源の管理・運用という観点は、リスク的な思考や行動と大きく共通している。さらに、具体的に「リスク」を対象とした人類学的研究としては、M. ダグラスとA. ウィルダフスキによる『リスクと文化』が挙げられる（Douglas and Wildavsky 1982）。その中では、リスク認識が社会形態によって異なるというリスクの構築主義的立場が打ち出されており、後の社会科学におけるリスク研究に大きな影響を与えている。

2004年インド洋津波により、瓦礫の山と化したピピ島の観光地区。津波は在住者や観光客にとって青天の霹靂であった（市野澤潤平撮影）。

リスクの現代性

しかしながら、上述のような人類学の研究対象にみられるリスク的な側面と、近年の社会科学全般における「リスク」研究の興隆を単純に同一視することはできないだろう。たとえば、社会学においてリスクに特に注目する論者たちは、現代社会におけるリスクのグローバル化を強調した上で、現代が伝統社会や前期資本主義社会とは異なった「世界リスク社会」（ベック 2003）の様相を呈していると鋭く指摘している。自然災害や環境問題、金融危機、テロなど新たなリスクの要因が地球規模で発生しており、それに対処する方法も、科学・合理的で数値・統計化がなされたものへと変化しているのである。

「リスク社会」の論者たちが指摘する、新たなリスクに直面する現代。そこにおいて、それでは私たち一人一人はどのように具体的に対処していくべきか。論者たちは、「リスク社会」の諸問題を指摘し、その問題への対処や解決の方策を探っていく。そこで示されるのは、リスクに直面した個々人が、一人一人に分配されるリスクへの責任を他のメンバーと共有するために、市民運動に積極的に「参加」したり、専門家の知識や決定を「信頼」することによって、他者と「連帯」していくという理想的なビジョンである。

暗い「リスク社会」

しかしながら、「リスク社会」についての議論からは、未来に向けての明るい側面ばかりではなく、暗い側面も垣間見ることができる。それは、リスクへの責任が個々人へと分配されることによって、人々が他者との連帯へと向かうよりも、むしろ不安や不信の高まった個々人がバラバラに分断されてしまうという筋書きである。

特に、リスクへの責任を新自由主義的に平等分配し自己決定を迫ることは、構造的弱者を非常に苦しい状況に追い込むことにもつながる。現代社会の生活の様々な局面に見出すことができるリスクをすべて完全に管理することなど、根源的には不可能である。不可能な指令を下されリスク意識のみ過度に高まる中、強者と弱者のあいだでの格差が増大し、強者はセキュリティの中に引きこもり、弱者は弱者であることを宿命論的に引き受けざるを得なくなる。

プロジェクトの課題と目的

上記のような「リスク社会」論をひとまず引き受け、また批判的に検討した上で、本共同研究「リスクと不確実性、および未来についての人類学的研究」が共有する課題と目的を簡潔に示しておきたい。

まず、現代社会に特徴的な「リスク」とは、いったいこれまで私たちが経験してきたリスク的な思考や行動とどのように異なるのか。特に、リスクの要因と対処双方の観点から、その差異と同一性を明らかにする必要がある。そのためには、人類学的研究の持ち味をいかし、リスクについての民族誌的データを収集し、地域ごと、トピックごと、文脈ごとの詳細な記述と比較を行うことが求められる。

次に、現代社会におけるリスク要因のグローバル化と、その対処によって生じる人々の希望と不安の両側面を含みこむ「リスク社会」論について、ややもするとトップダウンで巨視的かつ一面的になりがちな視角を、フィールドからの詳細な

幼児期の肥満について警告する広告。アメリカ社会において、肥満のリスクはすでに成人だけのものではない(碇陽子撮影)。

記述と照らし合わせ相対化する必要がある。グローバル化する現代社会において顕著に生じている「リスク化」とは、いったい何がこれまでと大きく異なった変化なのか。またその現代的な「リスク化」の帰結としてときに肯定的に、ときに批判的に指摘される「リスク社会」とはいかなる社会なのか。否、そもそも私たちが生きる現代社会とは、本当に「リスク社会」と呼びうるものなのか。

最後に、それが実体であれ虚構であれ、人々のリスク意識の高まりとともに私たちが確実に飲み込まれつつある「リスク社会」のイデオロギーに対して、人類学的なアプローチを試みることから、いかなるオルタナティブを構想することができるのか。それは、より微細な人々の営みの記述から、支配的言説に対する別種の可能性を探り、提示するというこれまでの人類学的実践に連なるものである。

以上の3点の課題と目的に取り組む過程で明らかになったのは、確かに新しい「リスク」がフィールドの様々な領域において実際に制度や技術として浸透しており、また個々人も「リスク・コンシャス」な主体としてそれを引き受けつつあるということである。災害や疾病についての公的な対処は、リスクを社会の中に確かに分配し、また個々人は安全や衛生を求めリスクを内面化していく。個人と社会が双方向に織りなす「リスク社会」は、より強固にそのプロジェクトを遂行しつつある。

慢性砒素中毒症状の患者。砒素はサイレント・キラーとも呼ばれ、バングラデシュの多くの住民を蝕んでいる(松村直樹撮影)。

だが、同時に明らかになったのは、そのような「リスク社会」はいまだ完成しきってはおらず、とくに生活世界のところどころでほころびを見せているということである。それは「労働」について自己責任ではなく共同性の中で対処するフィリピンの無職者であったり、「肥満」であることをプラスに価値づけ前向きに捉え直すアメリカのファット・アクセプタンス運動であったり、資源管理を迫るテクノロジーにブリコラージュで向かい合うマダガスカルの漁民たちの実践にみられる。

様々なレベルでのリスクの浸透と暗い「リスク社会」の出現から目をそらすことなく、フィールドの人々の日常的実践から脱出のためのオルタナティブを探る。私たちのプロジェクトは現在、そのあたりを探り進んでいる。

プロジェクトの経緯と構成

本共同研究は、数年間の私的な研究会活動を経て、2008年度より国立民族学博物館の共同研究として採択されている。2008年度には、それまでの活動の実績をふまえ、公開シンポジウム「人類学的リスク研究の探究」(澁澤民族学振興基金、民族学振興プロジェクト助成による)を開催した。そこで浮かび上がった問題関心や課題に取り組むべく共同研究会での発表と討議を継続し、2010年度には日本文化人類学会第44回研究大会(立教大学)において分科会「人類学的リスク研究の可能性」(代表者:市野澤潤平)を主催した。現在は、これまでの研究成果の公開のために出版企画を準備中である。

共同研究のメンバーは全員、国内外のフィールドでの調査経験をいかし、また新たな調査に取り組みながら、リスクをめぐる様々なトピックについて研究蓄積を重ねている。具体的な調査地は、日本、アメリカ、フィリピン、タイ、インド、バングラデシュ、トルコ、フィジー、ヴァヌアツ、マダガスカル、エチオピアなど、またトピックは地震、観光、砒素汚染、肥満、高齢化、HIV、人口問題など、多岐にわたっている。

本共同研究では、各メンバーが持ち寄るフィールドとトピックについての民族誌的データを統合し、「リスク」という現代社会において重要かつ比較的新しいテーマに対して、人類学が関連する他の学問領域と連携しながら取り組む可能性を拡張し、同時に既存の支配的な言説に対しオルタナティブを示すことで一石を投じることを目指している。

【参考文献】

ベック, ウルリッヒ 2003『世界リスク社会論:テロ、戦争、自然破壊』島村賢一訳 平凡社。

Douglas, M. and A. Wildavsky. 1982. *Risk and Culture: An Essay on the Selection of Technical and Environmental Danger*. Berkeley/London: University of California Press.

あずま けんたろう

名古屋大学大学院文学研究科准教授。専門は文化人類学、フィリピン社会における呪術・宗教についての調査研究。また近年は、労働や観光についても調査研究を行っている。論文に「観光・環境・生活:フィリピン・ボラカイ島の観光文化に関する予備的考察」(『宮崎公立大学人文学部紀要』16(1) 2009年)、「呪術・他者・理解:ポスト/構造主義と、あるエピソードを経由して」(『社会人類学年報』34 2008年)など。